近世怪奇談

倉島節尚編

古典文庫

近世怪奇談

倉島節尚編

古典文庫

古典文庫第五五一冊

平成四年十月二十日印刷発行　非売品

近世怪奇談

編者　倉島節尚
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所
発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二　古典文庫
電話（三九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1992. Printed in Japan

目次

凡例……3
一　怪談御伽猿　四巻四冊　臥仙序　明和五年版……5
二　怪談御伽童　五巻五冊　静観房好阿　明和九年版……81
三　怪談頤草紙　五巻五冊　源温故序　寛政九年版……221
四　奇説雑談　五巻五冊　生々山人　弘化五年版……347
所収本書誌……467

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

凡　例

一、『怪談御伽猿』（明和五年版）、『怪談御伽童』（明和九年版）、『怪談頓草紙』（寛政九年版）、『奇説雑談』（弘化五年版）の四種の版本（個人蔵）を底本とした。

二、翻刻に当たっては、漢字・仮名の別、仮名づかい、清濁、振り仮名、返り点等はすべて底本の表記にしたがった。仮名の「ミ・ハ」もそのままとした。
　ただし、漢字・仮名とも、字体は現行の活字の字体によった。

三、底本の誤りと思われる箇所には、その右傍（場合によっては左傍）に（ママ）とした。

四、『奇説雑談』以外は、底本に句読点が施されていない。翻刻に当たり、句読点のほしい箇所を一字アキとした。会話や心中思惟などで「　」がほしい箇所も、一字アキとしたところが多い。いずれも編者が私に行ったものである。

五　底本の丁付けは、三オ・三ウ　のように示し、本文を改行した。

六、挿絵は作品ごとに通し番号を施し、「挿絵第一図」のように記して、底本に

おける挿絵の所在を示した。

七、翻字原稿の段階で、山田忠雄先生の御校閲を忝うしました。先生は御多忙のなか、全頁にわたって底本と照合して数多の誤読を正し、判読し難かった箇所を解明してくださったほか、さまざまな事柄につき惜しみなく御教示を賜りました。ここに記して心から御礼申し上げます。

平成三年九月二十九日

倉島節尚

一

怪談御伽猿

四巻
四冊

臥仙序

明和五年版

怪談御伽猿序

足なくて雲の走るも怪しきに　何をふまへて霞ハたつぞと大空を打詠めたる折柄に　書林の何某といふ者　一部の書を携へ来りて見す巻の披(ひら)けバ近世の怪事のミ　されば了意坊が伽婢子素及子が実妖録も彦作が詞の花と散り　曽呂理が嘶も短夜の夢となりし」首ォ

後　かゝる怪書を見ず　発端に女猿の奇怪を談すれば　御伽猿として梓にちりばめて　世に普(あまね)くせよと予是が序作るも誠にすさまじきことか

明和四年

亥冬　　臥仙囲」首ウ

怪談御伽猿一之巻

目録

女猿の人間と偶せし奇怪の事
龍女と隠子と偶して子を産む事

二之巻

白猫美少人と化する事
菊の花女に化する事
発句にて雨を降する事
鳩の畫に奇妙を得し事
法名変して発句となる事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

三之巻」乙オ

美女水神を夫に持事

狐少年と化して娘を妻にせし事

狸旅僧と変し法花経を書事

猫小児の小袖を着る事

女生なから池水に入る事

四之巻

湖水の神美童に通ふ事

少年天狗となり天に上る事

衣桁の小袖より手を出し招く事

大山の如き大亀いつる事

豊年の神天下り給ふ事

目録終」乙ウ

怪談御伽猿之一

女猿の人間と偶せし奇怪の事

今ハむかし　肥後の国と筑後の国との堺に　南の関といふ處あり　その南の関より高瀬といふ所へ往来の道を小関越といふて　山坂しバ〳〵ありて四里半の行程なり　其半途に峠ありて　是を小関峠といふ其峠の山上に茶店ありて　旅人の休息所とす　其茶店の主人を大津屋三次郎とかやいゝけるか　此茶店に一疋の女猿を養おけり　是は知れる人よりあつかりしものとかや　時に此茶店の主夫婦この猿を寵愛しつねに臥す時ハ共に此女猿をいたきてふせりしに　此女猿あるし三次

郎を」一オ

したひなるゝ事子の親をしとふがせしか(如脱カ)ハ　三次郎も愛する事我女房よりも甚し　爰に下女のお京とて　年の頃十六七ばかりにて器量も余の常の女にまさりしか　この主三次郎いつとなく此お京をねやの内へよひつゝ　妾(てかけ)なんとのやふにしていつくしミけり　時にかの女猿いつとなく此お京と主の中よきをねたミ　腹立る事はなはたし　暫時にても　三次郎とお京と一所にいて物語などすれバ　彼女猿大きにいかり　お京にかきつきなどしけれバ　三次郎夫婦お京迚も此女猿をうるさく　今ハ本の主へかえさまほしくおもひ暮しぬ　頃ハ六月下旬のことなるに　あつきたえかたき夏の夜　もはや夜半の頃　三次郎ゆめとなく幻となくあちこち」一ウ

徘徊して一ッの山に入りぬ　三次郎心におもふやう　我此山へハ前かたも来りしかともおもひ　又は始て来りしやふにも思ひつゝそろ〳〵と行に　一ッの楼門あり　しかるに一人の童児そこを通りけるを三次郎呼ひとめて　爰ハいづくぞ　ととひけれバ　彼の童子こたへて　是の宮ハ京の比叡山山王大権現の宮なり　といゝつゝ過けれハ　三次郎さてハ日吉三王権現なりけるか　さらハ詣てかへらん　とすでに楼門の前に到らぬとせし處へ　浄衣に烏帽子きたる社人手に杖を携へいでゝ　かの三次郎を大にしかりて曰　汝なにゆへ此處へきたりし　汝は往昔この御社につかへて　大切なる神事を汝等夫婦してけがし奉りし故に　此御社より追放ち給ひしなり」二オ

第一図（怪猿一ノ二ウ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo